

5月の園だより



「お楽しみ会」 4月22日

INDEX

◇目次	1
◇園長のことば	2
◇子どもの生活・中津通信	5
◇クラス通信（年長、ひまわり、ふじ組）	6
◇クラス通信（年中、さくら、すみれ組、年少、たんぼぼ組）	10
◇中津だより5月号、5月学年便り	別紙
◇エプロンママ（年少組のみ）、スイミングママお手伝い日程・給食予定表	別紙
◇引き渡し訓練について	別紙

今年は、例年に比べ少し早めのさくらの開花でしたが、寒の戻りもあり長期間に渡りさくらの鑑賞ができましたね。入園式の頃、園庭の一番大きなさくらは、ちょうど満開で、子ども達の入園に花を添えることができました。当日は、あいにくの雨で肌寒い天候でしたが、子ども達はとても元気にぎやかに入園式を挙行することができました。今後の幼稚園生活が少しでも充実したものとなるよう願っています。入園当初は、毎日保護者の方から離れたくないと泣いて困らせる子ども多いようですが、5月の中頃には、幼稚園への目当てができて、きっと楽しく登園してくれることでしょう。



幼稚園では、学期毎にガーデニングの花を彩って、子ども達の目に届くように通路や水回りの付近に飾っています。これからの季節も花々は、ますます私たちの目を楽しませ、心を歓ばせてくれます。

花を見て心から美しいと感じることがありますが、「人はどうして花をみて美しいと感じるのでしょうか」いろんなご意見があると思いますが、やはり、そのあるがままの飾らない姿だからこそ、美しいと感じるのだと思います。

東日本大震災で、あの津波にも負けずに命の灯りをもした木々の姿を見ると、その姿は、そこに生活している人々の心に大きな希望と光を与えてくれました。ただ咲くだけで、その姿は見る人を大



きく勇気づけ感動を与えてくれます。このあるがままの姿、実は「子育てもこれと同じなのではないか」と、ふと思うことがあります。子ども達は、ただひたすらに伸びようとしています。お父さんやお母さんや先生に褒められるためではありません。ご褒美をもらうために、背が高くなったり、体重が増えたりするのもありません。ただひたすらに、純粋に伸びようとし、花咲こうとするのが、子どもの本質のような気がします。

そのために、子どものあるがままの可能性の芽を少しでも良い状態で、萌え上がらせるために必要なことがあります。それは、今の時期に必要なことを、子どもの発達に合わせて与えていくということです。それがひいては、小学校以降に大きく花開く、あと伸びすることに繋がってきます。このためのキーワードは「たのしいな(感情)」「やってみたいな(意欲)」「上手になりたいな(知能)」「みてほしいな(表現)」です。そして、そういう環境の中でこそ、子どもは主体的な活動を行い、自ら考えて行動し、失敗を繰り返しながら自ら学習し、いろんなものを習得していきます。これが本当の成長に繋がってきます。自分で気づいて修正した時こそ、学びが身になります。そして、特に気を付けなければ、いけないのは、跳び箱が8段跳べます、こんな〇〇なことができます、…などといった、「できること」、即ち、成果をあげて、それをこなすことができるのが、素晴らしい、といった親からの期待を一身に受けて、それに向かって、練習するようなことは、極力、慎まなければならないと考えます。先ほどふれたように、ご褒美をもらうために、子どもたちは成長しているのではないからです。そして、できるようにと、お尻をひっぱたいて、他と比較するような環境は、子ども自身に早くから劣等感を与えることにもなります。これは、子どもの成



長にとっては、マイナスの要因を、この豊かな子ども時代の土壌に撒いてしまうことになります。あいだみつをさんの詩に、「トマトはトマトだからいいのです。それをメロンにしようと、一生懸命にお尻をひっぱたかれて、悲鳴をあげているトマトがいらぁ」というようなものがありました。そういったことは、本当にかわいそうなことです。お子さんの行動には、一つ一つきちんと意味があります。こういう水のまき方をしたから、こういう育ちになった。これは、日々の生活の中で、毎日積み重なって、現在の成長があり、それが積み重なって未来に繋がっていくものです。子育てにあくせくして、余裕がない時ほど、「なんのために毎日生きているのか」という視点で、もう一度振り返って頂くと、案外、肩の荷が下りることがあります。悩みもその時は、大きなものを感じていても、あとで振り返った時、



“なんて小さなことだったんだろう”と思えると信じて、おおらかに子育てしていきましょう。

そして、子どもたちが豊かに、伸びようとする際に、発するさまざまな“つぶやき”にも、とても深い意味が込められています。それを注意深く観察すると子どもへの理解がより深まってきます。これは、とても大切なことです。生命の萌え上がる際に感じる多くのつぶやきを、ちょっとした際にメモすることで、大人が子どもから教えられることは、大変多いものです。そして、子ども目線のいかにやさしいことか、愛しくてやまない尊い存在かを子どものつぶやきにみることが出来ます。どうか、子どもたちの発する“つぶやき”に耳を傾けて、お母さん、お父さん自身が癒されて頂きたいと切望します。子どもの感性は、本当に素晴らしい、瑞々しいものです。大人が、“子どもの感性を育てる”と大上段に言うことが、いかにおこがましいことか、子どもに接するたびに実感します。自然の中で、子どもが感じ、発する瑞々しい捉え方を、大人はもっと大いに学ぶべきです。下記は 10 年以上、月一回の研修会でお世話になっている大阪の千里敬愛幼稚園の 5 歳児のつぶやきです。

「流れ星」
 なかつか ひなた(年長)

流れ星って 迷子の星やな
 お空 走って
 家族 探してるわ



これだけでは、ごく普通のつぶやきに聞こえますが、その背景を知った時、胸がつまりました。園長の小谷先生の編集後記から抜粋します。

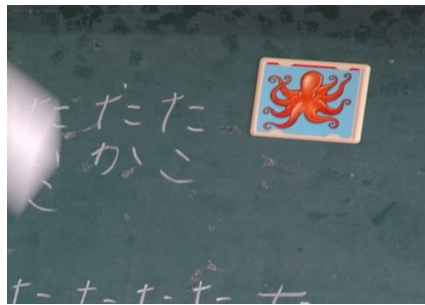
『このつぶやきは「自然」のジャンルに入れましたが、本来は「いのち」の中に入れるべきです。つぶやきの背景を知らなかったら、単に擬人化されたつぶやきとしか読めません。でも背景を知れば、この子の心情が痛いほど伝わってきます。一年ほど前にお母さんが亡くなっているのです。真意は分かりません。ただ私がこのつぶやきに触れたとき「迷子の星」は、お母さんご自身のように思えてなりません。宇宙の彼方で、残したお子さんのことを思い、流れ星になって夜空をさま迷っている光景が目に見え、目頭が熱くなりました。これほど感動したつぶやきは 28 年間でもありません。

二人の遺児のお世話をされている伯母さんが書き留めて下さったそうです。書き写しながらも強く心を打たれたと話されていました。

幼い子どもには一般的な死の意味は理解できません。しかし、最も身近な家族の死を、生活の中で欠落してしまった空間のように日々感じているでしょう。だから、このつぶやきが人の心を捉えるのです。』このつぶやきの背景を知った時、涙を禁じえませんでした。人の世の無常、亡くなったお母さんの心情、こどもの感性の素晴らしさを実感し、しばし、言葉を失いました。園便りでは、子どもの「つぶやき」を毎月掲載していきます。たくさんのご寄稿をお待ちしています。 園長 (2019.4.20)

絵カード教材について

中津幼稚園では、元国立国語研究所言語研究部長の村石昭三先生を中心とする言葉遊び研究会の研修を受けて、楽しく遊びながら、子どもが日常生活の中で、興味を示すものの名前や特徴その使い方を自然に覚えていくように工夫された教材を使い、言語知能の発達を促します。カードは1000枚、それを10のシリーズに分けて分離し、カリキュラムを保育の中で与えています。すでに過去の保育参観やHPでもご覧いただく機会がありましたので、もしよろしければ訪ねてください。



過去に、年長で、絵カードを使っての文字遊びを行いました。最初に「た」のカードを提示し、この文字が頭につく言葉知っているって聞くと、「たこ、たか、タイヤ、たいやき、たけのこ…」と10以上の言葉ができました。他に何か知ってる人?って問いかけると、子どもたちからは、「はい、はい」って大きな元気な声が教室に響きます。ある程度たくさんの言葉が出てきた後で、「実はね。このカードの後ろに、「た」のつく言葉の絵カードが入っているよ。さて、なんだろうね。“たかだと思う人?”。「はーい」「タイヤだと思う人?”「はーい」、「たこ だと思う人?”「はーい」と自分の予想をたてながら、子どもたちとのやりとり。“さて、じゃ、なにが隠れているか、一緒にみるよ。”ワクワク・ドーン“って担任の声と共に、カードを開くと、”タコでした。“。見事当たった、子どもたちからは、”やった!“との大きな歓声が響きます。こういった子どもの興味を引きながら楽しく文字に接する教材です。数年前まで、こういった教材の根底にある理論、すなわち、スイスの心理学者、ジャン・ピアジェ博士の、日本では、この研究の第一人者である、滝沢武久先生のご自宅に、FOB(園長が定期的に研修に参加している会)の仲間と、滝沢先生の著書である「ピアジェ理論に基づく、子どもの思考と認知発達」の本をテキストに学んできました。3年前に滝沢先生はお亡くなりになり、直接滝沢先生にご教授頂いたことは、この上ない素晴らしい時間でした。

この教材も、そういった子どもの発達を考慮して、どういう導入で、楽しく、面白く、興味を持たせ、知能の発達に寄与できるかを十分に配慮して作られています。実践と理論の両輪を大切に、子どもたちの可能性の芽を伸ばしていきたいと思います。来月からまた職員の研修会のため月一で都内の勉強会に行きます。こういった研修を、子どもたちに還元するよう今後も努力していくつもりです。

